



ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

2017 ARTA DIGITAL Rd.1 OKAYAMA
THE BEGINNING OF BRIGHT FUTURE

「速さの片鱗」

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

オートバックスと鈴木亜久里の挑戦、ARTA Project は 20 年目のシーズンを迎えた。
それを祝福するかのように、スーパー GT 選手権の開幕戦、岡山国際サーキットの先頭には
ARTA NSX-GT が就いた。

エースドライバーとなった野尻智紀がノーミスのアタックで Q1 を突破し、Q2 では、GT300 で
の雌伏で大きく成長し再び GT500 のステアリングを託されることになった小林崇志が早々にア
タックを決め、トップに立ったそのタイミングで他車のトラブルにより赤旗が提示されるとい
う幸運にも恵まれ、見事にポールポジションを獲得したのだ。



開幕前のテストではレクサス勢が圧倒的な速さを見せた。しかし決勝前のウォームアップ走行ではそれほど大きな差はなく、オーバートイクの難しい岡山でなら戦える、そんな予感が漂っていた。しかし、パレードラップが始まるとコックピットの野尻が無線で悲鳴を上げた。

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



「あ〜〜っ！なんかおかしいよ！」
レースエンジニアの星学文が対応策を無線で伝える。グリッド上には同じNSX-GTの17号車がストップしており、同じトラブルに見舞われてスロットルが開かなくなっているという報告が上がってきていた。実は前日の予選でもNSX-GT勢には同じトラブルが起きており、パーツを交換したマシンもあったのだ。

「スロットルを1回オフにして、電源をオンオフしてみてください」

「やったけど一緒だよ……戻らない！やり直したけど直らない！もう止まっちゃうよ！」

同じく NSX-GT の 64 号車にも同じトラブルが出た。

「何回やってもダメ。もうアクセルが1ミリも反応しないよ！

もうエンジンが止まりそうだよ」

コース上にストップしてしまった 8 号車 ARTA

NSX-GT は、作業車両に牽引されてピット

ガレージへと戻って来た。

ポールポジションから優勝争い

を見据えていただけに、野尻

の苛立ちも当然だった。

「もう全然無理！どういう

問題なの、これ!? 本当に！

エンジン掛かってないから

ハンドル重くて切れないし

さ、引っ張られてるけど

コースアウトしちゃうよ、

こんなの！」



ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

一方、8号車とは対照的に予選で赤旗の不運に見舞われ18番グリッドからのスタートとなっていたのが、GT300クラスを戦うARTA BMW M6 GT3の55号車だった。

GT500へ昇格した小林の後任として新人のショーン・ウォーキンショーを迎え、先輩の高木真一がリードして初戦を迎えた。

「アトウッドの立ち上がりはポルシェより速いね。

コーナーはちょっと遅いけど……」

高木は集団の中でも冷静に周りを見ていた。タイヤ無交換の戦略で、後方集団から抜け出す作戦だ。

28周目を過ぎたあたりからやがて周りがピットインを始め、前がクリアになったところで高木はプッシュを開始した。

 *S. Takagi*

 *S. Walkinshaw*

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



「高木さん、このペースで行けばポイント圏内にいけるので、このままでお願いします」

「なるべくタイヤは劣ってるけど、リアの左はちょっと使っちゃってるかな」

やがてステアリングを握るショーンのために、高木は参考になりそうな報告を上げてくる。

これに土屋圭市エグゼクティブアドバイザーが答える。

「気になるのは左のリアだけ？」

「リア両方だけど、右コーナーはキャンバーのおかげで結構曲がってくれてるね」

「了解です。あと15周は走りたいです」

今年から55号車のレースエンジニアを務める安藤博之が高木に伝える。

やがて各車がピットインを済ませ、粘りの走りを見せる高木は暫定首位まで浮上した。

「ポルシェがピットに入ったよ。2輪交換するか見といてよ」

「ポルシェはリア2輪交換でした」

これを見て、55号車陣営は無交換作戦の実行を決意する。

「タイヤ保ちそうな気がするけどなあ……」



高木がそう言うと、土屋が頷く。

「真一、無交換に賭けようか？」

「タイヤの状態は悪くない、すごく安定してる」

それを聞いて安藤エンジニアが決めた。

「じゃあ無交換で行きましょうか」

コース上の高木も、“乗れて”いた。

「前のランボに引っかかりそう。

どうする？あ、抜いちゃった」

土屋も大喜びで高木を賞賛する。

「真一、カッコイイよ！」

「神ってるよ、今日」



47 周目まで引っ張った高木がピットに飛び込み、給油を行なうと同時にションにドライバー交代を行なう。もちろんタイヤは無交換でピットストップ時間を大幅に削減して追い上げを図る。

ピットアウトしてみれば、55号車は4位まで浮上していた。まさに高木の“神ってる”ドライビングのおかげだった。

その直後、他車のクラッシュでセーフティカーが入ることとなった。一度コース上にマシンを止めてクラスごとに隊列を整え直すなど、ショーにとっては不慣れな手順に対応しなければならない。

「セーフティカーが入ったよ」

「今何位？」

「P4 だよ」

GT500 クラスを戦う 8 号車が早々にリタイアしたことで、55 号車の戦況を熱心に見詰めていた鈴木亜久里総監督も無線でアドバイスを送る。

「ねえ、前のZと遅いやつ、言いに行っという方が
良いんじゃないの？」

それで前の2台はどいてくれるってショーンに
伝えてやりな。ターゲットは前を走ってる
黒いベンツだからって」

これを聞いたショーンも冷静に答える。

「了解、次のクルマはメルセデス AMG だね」





残り 26 周でレースは再開。スーパー GT の戦いに不慣れなショーンは SC 走行中にタイヤの温度を下げてしまい、レース再開直後に苦戦を強いられてしまった。1 台に抜かれ、後方には 5 秒以内にさらに 4 台が続く厳しい状況だったが、ショーンはなんとか好走を見せた。「残り 10 周、このペースをキープしろ」そして無事に 77 週のレースを走り切り、ポジションを守り切って 5 位でチェックカードフラッグを受けた。



初戦で接戦の緊迫した状況下で、なおかつタイヤ無交換という簡単ではないレースをやり遂げたのは大きかった。

「P5、グッジョブ！」

「ありがとう、みんな。良いレースだったね。タイヤも完璧だった」

「良いタイヤマネジメントだったよ」



土屋が「みんなお疲れさん、よくやった！グッジョブ、ション！」
とチーム全員の健闘を讃え、安藤エンジニアが最後に
「素晴らしいデビュー戦になったね」
とションの走りをねぎらった。
「タイヤ無交換作戦が的中したね、チームもドライバーも最高の仕事
をしてくれた。言うこと無いね。次も良いレースをしたいね」
(土屋エグゼクティブアドバイザー)
結果は GT500 と GT300 で悲喜こもごも。
しかし、チームのパフォーマンスとしては明らかに光明が見える
2017 年の開幕戦だった。

ARTA Project

ARTA はまだ全てを見せ切ったわけではない。これから残る7戦で、真の力を見せてくれる。記念すべき20周年の年にどのような戦いを見せてくれるのか、そしてどこまで頂点へと近付くことができるのか。大きな期待を抱かせてくれる開幕岡山ラウンドであったことは間違いない。





ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL
You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO
BORDER
Team ZEROBORDER

©2017 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD